

野幌森林公園でクロテンを再確認

(平成 21 年度野幌自然環境モニタリング調査結果概要)

北海道森林管理局では、「百年前の原始性が感じられる自然林」の再生活動を実施している野幌森林公園（江別市ほか）の自然環境変化を把握するため、18 年度から、森林植生、歩行性甲虫相、菌類相、及び野生動物の 4 項目について調査を実施。

1 調査箇所（森林植生、歩行性甲虫相、菌類相）

- ① 平成 16 年秋の台風による風倒後、主として重機を用いた地拵を行った後、植樹などの森林再生活動が行われている箇所（「再生活動地」という）
- ② 風倒木を搬出後、植栽なしの箇所（「半処理区」という）
- ③ 風倒後、試験的にそのまま保存した箇所（「非処理区」という）
- ④ 野幌を代表する林相を有し、風倒被害をあまり受けずに現存する「百年前の原始性」が感じられる森林（「良好な自然林」という）

2 森林植生

良好な自然林については、30m×30mのプロットを設置し、プロット内の樹木の樹高・直径、植物の被覆度等を測定。他の調査箇所については、5m×5mのプロットを3～5ずつ設定し、出現する植物を記録。

(1) 良好な自然林（3 箇所）

- ① トドマツ林
上層木の半数をトドマツが占める。(最大樹高はキタコブシ 25m) 林床はハイイヌガヤが約 70%を占め、チシマザサが 15%を占めていた。
- ② トドマツ・落葉広葉樹林
上層木本数の約 80%をホオノキ、シナノキ、ウダイカンバなどの落葉広葉樹が占める。(最大樹高はウダイカンバ 25m) 林床はハイイヌガヤが 90%以上被覆している。
- ③ アカエゾマツ林
上層木の半数をアカエゾマツ占める。(最大樹高はシナノキ 29m) 林床には優先種がみられず、ハイイヌガヤが 8%でやや多く、シダ類、ツルアジサイのほか樹木の稚樹や草本の種数が豊富だった。



トドマツ林の様子

(2) 非処理区（1 箇所）

更新木は、ノリウツギ、ヤマグワなどの非高木性樹種が半数以上を占めるが、ヤチダモ、シナノキの高木性樹種も 4 千本/ha 発生。トドマツ稚樹も増えている。



非処理区の様子

(3) 半処理区（1箇所）

更新木は、エゾニワトコ、ヤマグワなどの非高木性樹種が半数を占めるが、ヤチダモなどの高木種の定着が徐々に進んでいる。

(4) 再生活動地（5箇所）

植栽木はほぼ全域で昨年を上回る成長がみられ、ケヤマハンノキでは3~4mを越すものもあった。下刈りの影響で25cm以下の更新木が減少している箇所がみられたが、天然更新した高木性樹種も順調に成長している。

3 歩行性甲虫相

ピットフォールトラップにて歩行性甲虫を捕獲することにより調査を実施。

(1) 21年度の総捕獲種数は、73種（20年度は79種）

捕獲頭数は昨年の7割、ピーク時（19年）の6割に減少した。

(2) 再生活動地では、森林性種と開放性種の個体数の差が小さくなる傾向が確認できた。

4 菌類相

一調査箇所あたり50×5mの帯状区を2本設定し、木材腐朽菌の子実体を調査。

	再生活動地	自然林	無被害人工林
全調査区で見られた種	ウスバシハイタケ		
特徴的な種	カワラタケ レンガタケ	カワラタケ サカズキカワラタケ	モミサルノコシカケ

再生活動地では、着実に枯死木の腐朽が進んでいるが、依然として切り株や枯れた木に生息する種が多い。

5 野生動物相

自動撮影装置を12箇所に設置し、夏と秋の2回夜間撮影を実施。

(1) 撮影頻度が高かったのはキツネであったが、ネコも多く撮影された。

(2) 特定外来種のアライグマは8箇所で撮影され、森林再生への影響が懸念されるエゾシカは3箇所で撮影された。両種とも生息状況に大きな変化はみられない。

(3) 本年度の調査でクロテンが新たに撮影された。野幌で撮影されたのは16年以降初めて。



撮影されたクロテン

問い合わせ先：北海道森林管理局 石狩地域森林環境保全ふれあいセンター
〒064-0809 札幌市中央区南9条西23丁目1-10
Tel. 011-533-6741 E-mail: h_ishikari_f@rinya.maff.go.jp